



















## 4. 2 必修選択科目としてのドイツ語

北園高校のさらなる特徴として、ドイツ語についてのみ必修選択科目としてのドイツ語、すなわち「ドイツ語専修」がある。これは、3 年次に英語に代わってドイツ語を第一外国語として 6 時間(2013 年度までは 5 時間)選択し、「文法力、語彙力、読解力、表現力を身につけ、大学受験あるいは大学入学後の学習・研究に即時用いることができる高度なドイツ語を身につける」ことを目的とした、いわゆるドイツ語受験クラスである。1949 年にこの制度ができた当初の履修者は 10 名前後の少数であったが、1950 年代後半～1960 年代前半には 30 名程度にまで増え、多くのドイツ語受験者を輩出してきた。1970 年代後半になると、英語重視の影響を受け、以後履修者は減る一方であったが、近年は再び履修者が増えてきた(表 5 参照)。

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015
人数	2	4	0	4	8	9

表 5 過去 6 年間のドイツ語専修履修者数<sup>8</sup>

とりわけここ 2 年間はドイツ語専修を履修する生徒が増加したが、その背景には PASCH との関連も見られる。現に今年度 9 名を対象とした意識調査では、全員がドイツ語専修の履修と PASCH との関連があると見ている。具体的な回答としては、授業外の活動を通じてドイツ語への興味・意欲が増した、また、継続したいと思った、ドイツ短期留学やアジア国際キャンプの場でドイツ語が出来なくて困ったのもっとしっかり勉強したい、(CEFR に基づく)A1・A2 レベルの文法からさらにもっと詳しく学びたい、生徒新聞の作成に際して文章力の向上を図りたいといった事があげられた。もっとも、ドイツ語専修クラスは 1・2 年次の特別クラス出身者のみということではなく、通常のクラスからも希望する生徒もいる。そのため、授業では、1 学期においてはまず受験に必要な文法事項を初めから総合的に学習し、2 学期には文法問題に加えて読解の問題集や雑誌・インターネットの記事など、様々な文章を構造をふまえて解釈し、読解力と語彙力をつけるよう指導している。また、2 学期終了前後には、入試の本番に向けて各大学の過去問題に取り組んでいる。年間の授業時数としては、1 学期および 2 学期が各 60

<sup>8</sup> 履修者数が 0 名であっても希望者数が 0 名であったとは限らない。実際に 2012 年は希望者が 1 人いたが、クラスとしては成立しなかった。

～66 時間、3 学期は 6 時間程度であるが、1・2 学期は期末試験後に、また 3 学期は自宅学習の期間に別途集中講座が設けられ、補習が行われる。

ドイツ語専修を選択するうえで、メリットおよびデメリットはそれぞれ存在するが、1・2 年次の基礎をもとに、3 年次で集中して学習することで、大学受験に必要な能力は最低限、あるいは個人によっては十分に身につけることができる。他方、ドイツ語受験およびドイツ語のセンター利用を採用している大学は限られるため、受験で使いたくても志望校によっては諦めなければならない場合も生じる。また、大学入学後のドイツ語既修者の受け皿という点でも、適切な受け入れ体制は十分とは言えないだろう。この点は高大連携の枠組みの中で今後解決されることを望む。

## 5. オリンピックを視野に入れた外国語教育

最後に、2020 年東京オリンピックも視野に入れ、今後どのような外国語教育が必要となるかについて考えてみたい。

既に見てきたとおり、北園高校では長い伝統のもとで複数の外国語教育が行われてきた。ここで肝心なことは、外国語の授業においては単に言葉を学ぶだけでなく、その言葉を通じて他国の文化や異なる価値観を持った他者に出会い、それらを自らと比較し相対化することで、複眼的な視点を育むことにある。こうした教育活動を実践するには、教室内での教科書による学びにとどまらず、様々な観点からアプローチしなければならない。

### 5. 1 つながる外国語教育

とりわけドイツ語に関して言えば、現在北園高校では PASCH の枠組みや提携校との交流事業において、学外でも様々な活動を通じてドイツ語、ドイツ、ドイツ人、ドイツの文化に直に触れる機会がここ数年で劇的に増えた。このように、「言葉」だけでなく、「文化」および「社会」とつながる外国語教育活動を通じて、高度なグローバル社会を生き抜く力を育成することが、公益財団法人国際文化フォーラムによって提唱されている。そのためには、総合的なコミュニケーション能力に加えて、グループ学習による「協働力」、情報処理や問題解決に必要な「高度思考力」、そしてそのための「情報活用力」といった、いわゆる 21 世紀型スキルを身につけることが求められる(公益財団法人国際文化フォーラム(2013))。これを普段の授業において実践するのが、「外国語学習のめ

やす」を指針とした新たな活動型のプロジェクト授業設計である。

## 5.2 オリンピックを見据えた学習プロジェクト

筆者は、2015年8月、同フォーラムが主催する「外国語学習のめやす」マスター研修においてそのヒントを得た。この研修では、日本語・中国語・韓国語・英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語を担当する教員が全国から集まり、「めやす」の基本概念から学び、最終的に学習プロジェクト案を作成するに至った。その準備は、テーマおよび学習者の想定、場面状況およびシナリオ(活動内容)の記述、シナリオの分析<sup>9</sup>、ルーブリック評価の作成、形成的および総括的評価の記述など、入念に計画されている。

そして今回筆者が実践構想として掲げた内容は、「東京ガイド 2020 ドイツ語！」と題して、高校生の視点から見た東京の名所や食事のスポットのパンフレットをドイツ語で作成すること、また、実際にボランティアとしてドイツ人の観光案内を手伝うことを想定したプレゼンをするものの二つだ。対象は、ドイツ語2年目の特別クラス42名で、全体的な活動の流れは以下の通りである：

- ・グループごとに、まずは日本の首都東京とドイツの首都ベルリンを比較し、どのようなスポットが紹介されているか、またドイツ語ではどのような語彙が用いられているかを様々なツールを用いて調べ、その特徴や語彙についてリストを作成する。
- ・自分たちの紹介したい内容を決め、リストを参考にパンフレットを作製する。
- ・完成したパンフレットをもとに、プレゼン資料の原稿を書く。
- ・プレゼンに用いる写真等を選定し、資料を完成させる。
- ・全体で一度リハーサルを行い、後日発表する。

発表の際には、可能な限りドイツ人も招待し、ルーブリックを用いて評価を行う。またグループ同士でも評価を行い、ベストのグループも選定する。総括的評価の対象はプレゼンのほかに成果物(パンフレット)も含める。

こうして、オリンピックという大きな題材をもとに、グループ学習を通じて協働力、高度

---

<sup>9</sup> 各々の活動において、「わかる」・「できる」・「つながる」という項目が、「言語」・「文化」・「社会」という領域でどのように関連し合っているか、またそれらが「関心・意欲・態度/学習スタイル」・「既習内容・経験/他教科の内容」・「教室外の人・モノ・情報」と連携しているかどうかを分析するための作業で、3×3+3分析と呼ばれる。

思考力、情報活用力を育むような授業を今後実践する予定でいる。もちろんこれは筆者にとっても初めての経験のため、途中の過程で様々な問題点が浮き彫りになってくるであろう。それらを改善しながら、最終的には日々の授業で実践可能な学習プロジェクトを考案していきたいと考える。

## 6. おわりに

本稿では、北園高校の第二外国語教育およびドイツ語教育の特徴、またその実践について報告した。もっとも、ここで述べた事例は一般的とは言えないだろう。公立の高校でドイツ語履修者が200人以上もいるケースはむしろ稀である。筆者自身、これまで複数の公立高校でドイツ語教育に携わってきたが、その全てが10～20名程度の少人数クラスであった。また、そこでは北園高校のようにドイツ語での恵まれた国際交流を実現できるような環境も整っていない。それゆえ、普段の授業における教員の働きかけが重要となる。

外国語教育を単なる言葉の学習ではなく、多様性を持った多言語・複言語教育へとつなげるためには、教師の絶え間ない努力と創意工夫を日々重ねなければならない。またそのような指導者を育てるためにも、教員同士の情報交換の場や、高大連携による相互的な協力・支援が一層必要となるだろう。本稿がその議論の発端の一部となれば幸いであり、また、2020年東京オリンピックが多言語・複言語教育の発展の契機となるよう願ってやまない。

(東京都立北園高等学校)

## 参考文献

- 伊藤直子・能登慶和・前田直子(2011)「都立北園高校におけるドイツ語教育」 松岡幸司編『教室という現場から考える日本のドイツ語教育』日本独文学会研究叢書 079号。
- 大木充・西山教行編(2011)『マルチ言語宣言—なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』京都大学学術出版会
- 牧幸一(2001)「高等学校の立場から—カリキュラムを中心に」『ドイツ語教育 6』ドイツ語教育部会会報 54:82-89.

『複言語・多言語教育研究』日本外国語教育推進機構会誌 No.3 (2015) pp. 69-81

公益財団法人国際文化フォーラム編 (2013) 『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』国際文化フォーラム.

インターネット

文部科学省 「平成 25 年度高等学校等における国際交流の状況について」

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2015/04/09/1323948\\_03\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/04/09/1323948_03_2.pdf)

ゲーテ・インスティトゥート東京 「PASCH 新しい国際交流のあり方」

<http://www.goethe.de/ins/jp/ja/lp/lhr/isp.html>

Practice and future prospects for German education at Kitazono High School

Yoshikazu NOTO

In the midst of globalization especially in Japan with the Tokyo Olympics expected in 2020, the importance of learning foreign languages, other than English, has been heightened. Under these circumstances, for the learning of German, various attempts have been made to encourage students to study the language by the German Foreign Ministry. Kitazono High School has developed an education system that promotes the learning of many foreign languages and currently plays an important role in multiple language education at a secondary school level. Herein, this report focuses on the actual practice for teaching the German language that has recently been made at Kitazono High School and discusses the future prospects for education in regards to foreign languages in view of the Tokyo Olympics.